

学問による生存の正当化とその前提 —『悲劇の誕生』における「ソクラテス主義」の構造—

内田 智之

はじめに

ニーチェは『悲劇の誕生』（1872年刊、以下『誕生』と略記）において、ギリシア悲劇衰退の要因を「学問」ないし「学問の精神」（GT 17, 111）の台頭に求めている⁽¹⁾。ニーチェはたとえそれが既存の宗教的信念を掘り崩す帰結を伴うとしても、知識そのものを愛し求める「学問」の営みを根底において支えることになった学問理解を「ソクラテス主義」と呼び、その構造を分析し、批判の対象として提示した。

しかし、そのように学問的探究をそれ自体として価値ある営みとして捉える「ソクラテス主義」そのものは、何によって支えられているのだろうか。ここで注目すべきは、ニーチェが学問的探究の無上の価値を支える「ソクラテス主義」の基盤を、「人間は学問的認識によって事物そのものを知りうる」という信念に見出していることである。本稿ではこの信念を「實在論的信念」と呼び、これがいかなる意味において学問的探究をかかえる仕方でも価値あるものたらしめるのかを解明することを課題とする。というのも、この問題は、後年のニーチェによる真理批判にも連なる重要な論点であるが、先行研究による検討はなお十分とはいえないからである。

以下ではまず、『誕生』の学問論を概観し、それに対する先行研究の解釈を批判的に検討する（1）。そして、「ソクラテス主義」の構成契機を分析したうえで（2）、ニーチェが「ソクラテス主義」を目的論の一形態として論じていることに注目し、当該の構成要素と實在論的な信念の基礎付け関係を明らかにする（3）⁽²⁾。

-
- 1 『誕生』において「学問」は、「因果」の探究（GT 15, 99）、「概念・判断・推論の機構」（GT 15, 100）、歴史的事実の探究（GT 23, 146）など様々に特徴づけられるが、総じて、根拠をもって行われる知識の探究を意味するものと理解することができる。
 - 2 五郎丸（2004）もニーチェが「ソクラテス主義」を目的論的な立場に結び付けていることを指摘しているが、ニーチェはその点を深く追及していないと判断している（五郎

1. 生存の根本的苦悩への対処としての学問

1.1 『誕生』の学問論の概要

ニーチェは『誕生』において、人間の生が根本的な苦悩を内包しているとする。この苦悩は「生存の永遠の傷」（GT 18, 115）とも表現され、学問は、まさにこの傷に対する一種の治療法あるいは防衛機制として価値づけられてきたのであり、そのような価値づけの起源はソクラテスに存すると論じられている。こうした見解を端的に示すのが以下の記述である。ニーチェはソクラテスが「理性」によって「死ぬことができた」最初の人間であると指摘して、次のように述べている。

そしてそれゆえに、死へと赴くソクラテスの像は知識と論証によって死の恐怖から解放された人間の像として、学問の入り口に掲げられ、各人に学問の使命を想起させる紋章の盾なのである。その使命とはすなわち、生存を理解するものにし、それによって、正当化されたものとして現れさせることである。（GT 15, 99）

学問が全うすべき「使命」とは、苦悩を内包する生存を「正当化」することであり、ソクラテスの死はそれが可能であることを示すものとして了解されてきた、とニーチェは述べる。『誕生』において、こうした学問観は「ソクラテス主義」（cf. GT 13, 96）と呼ばれ、生存の根本的苦悩を解決可能と見なす点で「オプティミズム」ないし「オプティミスティック」と性格づけられている（cf. GT 16, 102-3; GT 18, 117）。

上掲の引用箇所が続いて、ニーチェは「ソクラテス主義」が「教養世界の最も広範な領域にわたる、想像を絶する知識欲の普遍性」を生み出し、学問の推進力になっていたと論じる（GT 15, 99）。そして、この動向はなおも継続しているという認識のもと、ニーチェは同時代の動向を「最高度の認識能力を備え、学問に携わる、ソクラテスを原像にして父祖とする理論的人間を理想としている」と捉え、この動向を「アレクサンドリア的文化」と命名する（GT 18, 116）。

以上から明らかなように、ニーチェは「ソクラテス主義」を古代から近代まで、

丸 2004, 240-1)。

一定の影響力を持ち続けた、学問に対する伝統的な価値づけの論理として考察しているのである。

1.2 道具主義的解釈

もっとも、「学問は生存を根源的な苦悩から救済するものとして価値づけられてきた」という主張の実質を捉えるためには、ニーチェが前提とする生存の根本的苦悩なるものが一体何を意味するのか、学問はそれにどのように対処するのか、という問題に取り組む必要がある。

これらの問題に関しては一定数の論者に共通する見解がある。それによれば、ニーチェが前提とする生存の根本的苦悩とは、生きていくなかで至る所で不可避免的に意に反する苦しい出来事に見舞われることである。ここでは行き届いた整理がなされている研究として Came (2018) を取り上げる³⁾。Came (2018) は『『誕生』におけるニーチェの狙いは、苦悩の遍在性と必然性にもかかわらず、生存は肯定に相応しいものだ」と示すことだと考えられる」とする (Came 2018, 417; cf. 竹内 2009, 15)。

そして、ニーチェが問題としている苦悩が苦しい出来事の「遍在性と必然性」と解釈されると、「ソクラテス主義」は学問的知識を、そうした意味での苦悩を除去する方法を教える万能の道具——例えば、病気の原因についての知識によって、病気に対する適切な予防・措置を行えるようにするというような——と見なす立場として理解される。Came (2018) は「ソクラテス主義的な探究者は (i) 生存の諸悪は偶然的なものにすぎず、(ii) 学問の力には「限界がない」と信じている」と解釈し、その具体例として「今日のトランスヒューマニストやその他の技術ユートピア論者」を挙げる (Came 2018, 420–1; cf. 竹内 2009, 15; Gerhardt 1998, 14)。

すなわち、Came (2018) に代表される解釈では、「ソクラテス主義」は学問的知識をあらゆる困難を除去する道具になるものと見なす立場として解釈されている。以下ではこの解釈を「道具主義的解釈」と呼ぶ。

1.3 道具主義的解釈の問題点

道具主義的解釈は苦悩からの救済策としての学問を問題とする『誕生』の学問論の基本的な視座を捉えようとしているが、以下で見るように、「ソクラテス主義」の成立基盤を分析・批判する議論には、道具主義的解釈では説明しきれない記述が

3 類似する解釈としては竹内 (2009) や Gerhardt (1998) を参照。

見いだされる。

ニーチェはソクラテス主義的学問観の基礎になっている「不動の信念」を次のように説明している。

いまやもちろん、[……] ソクラテスという人格においてはじめてこの世に現れた深遠な妄想が存在する。すなわち、思考が因果の導きによって存在の最内奥にまで到達し、存在を認識することができるだけでなく、存在を修正することさえ可能であるという不動の信念である。(GT 15, 99)

ソクラテス主義的学問観を支える「不動の信念」は、二つの契機から成る。一つは「思考」が「存在の最内奥にまで到達し、存在を認識することができる」という信念である。これは後続する箇所では「全太陽系の合法則性への信念」(GT 15, 100)や「事物の本性の究明可能性」への信念とも言い換えられているため、この信念は、あらゆる対象そのものの有り様を、学問的認識の対象とすることができるという信念であると考えられる。本稿ではこれを便宜上「實在論的信念」と呼ぶ。もう一つは、「修正」の可能性への信念、すなわち苦悩を内包する生存を肯定の対象に転じる可能性への信念である。

さらに、ニーチェは實在論的信念が「修正」の可能性への信念の基礎にあると考えている。ニーチェは学問によって生存の苦悩を退ける人間を類型化して、「理論的オプティミスト」と呼び、そのような人物は「上述のような事物の本性の究明可能性への信念において、知識と認識に万能薬の力を授ける」(GT 15, 100)とする。ここで重要なのは、「上述のような事物の本性の究明可能性への信念において」の、「において (in)」である。すなわち、あらゆる対象そのものの有り様を明らかにできるという信念があつてこそ、知識と認識は生存の苦悩を癒す「万能薬」として認められる、と論じられているのである。

こうした基礎づけ関係を認める立場から、ニーチェはカントとショーペンハウアーをソクラテス主義的な学問観の批判者として位置付ける。まず、ニーチェが何を彼らの哲学的成果と考えたのかを確認しておこう。

カントとショーペンハウアーの途方もない勇敢さと知恵が、きわめて困難な勝利に、すなわち論理の本質に秘匿されている一方で、私たちの文化の根底にもなっているオプティミズムに対する勝利に達した。このオプティミズムは、こ

の立場にとっては疑う余地なき永遠の真理に支えられて、世界の謎の一切を認識し、解明することができるということを信じ、時間、空間、そして因果性を最も一般的な妥当性をもつ完全に無条件的な法則として取り扱ったが、カントはこれらのものが実際にはいかにして、単なる現象、マールヤーの産物にすぎないものを、唯一にして最高の実在に祭り上げ、事物の内的かつ真なる本質の地位に就け、ショーペンハウアーの言葉で言えば、眠っている者をさらに深く眠り込ませることによって、この本質を実際に認識することを不可能にすることに役立っているにすぎないのかを明らかにしたのである [……]。(GT 18, 118)

ここでニーチェが「私たちの文化の根底になっているオプティミズム」と呼ぶのは、「アレクサンドリア的文化」の本質たる「ソクラテス主義」にほかならない。そして、これを退けるのは、時間・空間・因果を人間の認識の条件として位置づけ、物自体に対するそれらの適用を退けたカントとショーペンハウアーの哲学的成果である、とされている。そのため、ここでは、人間の認識は対象そのもの（物自体）の有り様を捉えているとは言えない、という議論がソクラテス主義的な学問観の基礎にある実在論的信念を破壊する次第が語られているのである。

道具主義的解釈の難点は、以上のような議論において想定されているソクラテス主義的な学問観において実在論的信念が占める不可欠な位置を、なお十分に説明できない点にある。ここまで見てきたように、ソクラテス主義的な学問観を根底で支えているのは、知識は対象そのものを捉えるという信念である。換言すれば、この学問観は、知識が人間の認識の制約の帰結にすぎないこと、あるいは人間にとってのみ妥当なものであることには、満足することができない。したがって、ここで問われているのは、知識の身分をめぐる理解の次元——それを人間にとってのみ妥当するものとみるのか、それとも対象それ自体に妥当するものとみるのか——にほかならない。

他方、道具主義的解釈は、問題を知識の身分についての了解ではなく、知識の道具的有用性に関するものとして捉えている。しかし、知識が対象それ自体に妥当しなくとも、それが苦しみを除去する方法を教えてくれる（有用である）と信じることは依然として可能であろう⁽⁴⁾。例えば、事物は人間にとっては因果的連関のもと

4 Silk & Stern (2016) は「ソクラテス主義」を「人間が持つ学問的情熱の対象の宝庫としての被造世界への愛」と理解し、カントとショーペンハウアーによって否定される「形而上学的妄想」を世界が無限に探究可能な構造を有している、という信念だと解釈する

で姿を現すのだから、因果的法則についての知識は対象それ自体に妥当しなくとも、事物の振る舞いを予測し、対処することを可能にするだろう⁽⁵⁾。

道具主義的解釈の問題点は、以上の検討によっておおむね明らかになった。とはいえ、この解釈の出発点そのものには、なお検討すべき点が残っている。すなわち、生存の根本的苦悩を、苦しい出来事の不可避性と偏在性として理解することが、『誕生』のテキストに即してどこまで正当化されるのか、という点である。Came (2018) をはじめとする道具主義的解釈は、この点を本文の記述そのものから論証するというより、ショーペンハウアーからの影響という事実によって補強しようとしているように見える (Came 2018, 416-7; 竹内 2009, 14-5)。そこで、以下ではまず、ニーチェが問題としている苦悩の内実を、『誕生』の記述に則して明らかにすることを試みたい。

2. 「ソクラテス主義」の構成要素

2.1 生存の根本的苦悩としての生存の無根拠性

学問と生存の苦悩の連関を論じる際、ニーチェは生存が苦悩を抱えたものとして了解される事態を取り上げ、そうした了解を「実践的ペシミズム」と呼んでいる。以下は、学問のために多大な努力が行われてきたことの重要性を指摘した箇所に続

(Silk & Stern 2016, 431)。しかし、学問的知識が妥当しない対象（物自体）の存在が想定されたとしても、それ以外の対象を探索し続けることは可能なはずである。そのため、この解釈でも知識が対象それ自体に妥当しなければならない理由は説明されているとは言い難い。

- 5 道具主義的解釈もカントとショーペンハウアーへの言及を参照してはいるが、本稿が問題にする実在論的信念の位置づけに十分接続される仕方では提示されていないように思われる。Came (2018) はカントとショーペンハウアーによって否定される信念を「ソクラテスの主体による目的の実現可能性に関する予測」(Came 2018, 422) と解釈しているが、なぜそのように言い換えることができるのかを説明していない。竹内 (2009) もまた、知識の道具的な万能性への信念を「ソクラテス主義による知の絶対普遍性要求」と言い換え (竹内 2009, 15)、それを退けて「パースペクティヴの相対性」への気づきをもたらしたのがカントとショーペンハウアーだと整理する (竹内 2009, 18)。しかし、ここでも「どんなものにも知識によって対処できる」という実践的な有効性への信念が、なぜ「どんなものの本性も認識できる」という認識論的普遍妥当性への信念に読み替えられるのか、ひいては、後者の信念が、対象をそれ自体として把握することの不可能性という認識論的制約によって退けられるとともに、前者までもが退けられねばならない理由は、なお十分に説明されていない。

く記述である。

というのも、あの世界的傾向に費やされている力の途方もない全体が、認識の奉仕に用いられずに、諸個体や諸民族の実践的（praktischen）すなわち利己的な目的に向けられる場合をひとたび想像してみるなら、次のようになるからだ。すなわち、おそらくは全面的な殲滅戦や絶えざる民族移動のなかで、本能的な生への欲求はひどく衰えてしまうだろう。すると、個人はきっとフィジー島の住人のように、息子として両親を、あるいは友人として友人を絞め殺してしまったのなら、自殺の慣習のもとで義務感情の最後の残りを感じざるをえなくなるだろう。以上が実践的ペシミズム（praktischer Pessimismus）であり、それは同情からの民族殺戮の身の毛もよだつ倫理を生み出す可能性さえあるのだ——、もっとも、芸術がとりわけ宗教や学問といった何らかのかたちで、あの毒気を治療ないし予防するために現れない場所では、このペシミズムは世界にいたるところで存在しているし、かつても存在したのである。（GT 15, 100）

ニーチェは「実践的ペシミズム」への対処を「芸術（Kunst）」と呼び、学問もそうした「芸術」のうちに数え入れられている。つまり、学問による生存の苦悩への対処は、「実践的ペシミズム」への対処として行われるのである。

注目すべきは、ニーチェがここで一種の思考実験によって、「実践的ペシミズム」が到来する仕組みを説明していることである。まず、認識に向けられるべき力の一切が、個体や民族の実利的・利己的な目的へと振り向けられる場合が想定される。そのとき、全面的な殲滅戦や絶えざる民族移動のような苛烈な闘争が常態化し、そのなかで「本能的な生への欲求」は著しく衰弱してしまう。これが「実践的ペシミズム」である。そして、実利の追求が終わりのない闘争を産み、やがて生への倦怠・嫌悪へと帰着するという記述は、生存することを目的とする生が自らの無根拠性という深刻な問題に直面する状況を記したものとして読むことができるだろう。すなわち、生存を目的とする目的・手段の連関に一切を従属させることに腐心するなかで、苦難に直面し続け、生存という目的の自明性が失われ、「生存は一体何のためにあるのか」という問いが生じてしまう事態が、「実践的ペシミズム」の到来として語られていると考えることができるだろう。

したがって、学問によって対処されるべき生存の根本的苦悩とは、「実践的ペシミズム」において洞察される苦悩、すなわち生存そのものが目的たる根拠をもたな

いということである。本稿では、これを「生存の無根拠性」と呼ぶ。

2.2 学問による生存の無根拠性への対処（1）：認識の快樂

ここまでの考察から、ニーチェが前提とする生存の根本的苦悩が、生存の無根拠性であることが明らかになった。では、ソクラテス主義的な学問観において、学問はどのように生存の無根拠性に対処するのだろうか。

この問題に対する応答は、「アレクサンドリア的文化」ないし「ソクラテス的」文化の成立基盤についての分析に見られる。ニーチェによれば、当該文化は「ソクラテス的な認識の快樂と、生存の永遠の傷を認識によって癒すことができるという妄想」によって成立しており、そうであるがゆえに人間を生存へと動機づけている（GT 18, 115-6）。つまり、ソクラテス主義的な学問観において、学問は「ソクラテス的な認識の快樂」と「妄想」によって生存の無根拠性に対処すると考えられているのである。

まず、「ソクラテス的な認識の快樂」ということでニーチェが表現しようとするのは、学問的探究を遂行する人間が、探究の成果への期待だけでなく、探究の過程そのものに意義を見いだしている、という事態である。つまり、ニーチェは学問的探究を、遂行過程自体に対する積極的な価値づけを伴うものとして捉えるのである。

理論的人間も芸術家と同じく、現存するものに限りない満足を抱くのであり、芸術家がそうであると同様、その満足によって、ペシミズムの実践的倫理からも、そのペシミズムが暗闇の中でのみ輝かせるリュンケウスの眼から守られている。[……] 理論的人間は剥ぎ取られ捨てられていく覆いそのものを享受し、満足するのであり、しかも、自らの力によって成就していく、つねに幸福なる暴きのプロセスのうちに、自らの最高の快樂目標を有している。（GT 15, 98）

ソクラテス以来の学問的探究の主体の典型たる「理論的人間」は、学問的探求の「プロセス」にこそ快樂を覚え、それによって「ペシミズム」から保護される。つまり、ニーチェは、学問的探究に没頭することによって、生存の無根拠性に悩まされずに済む、という事態を考えているのである（cf. GT 15, 101）。

学問的探究が、その過程に「快樂」を内在させたものとして捉えられるのは、

様々な困難にもかかわらず学問が現に行われているという事実を説明するためである。すなわち、探究の成果は容易にあがらないことへの苦しみや自分の成果が他者により越えられるかもしれないという不安等々にもかかわらず、学問が熱心に行われていることを理解するには、学問的探究者が探究の過程自体に「快樂」を覚えていると考えざるを得ない、とニーチェは主張する (GT 15, 99)。

そして、ニーチェはこうした学問理解を、レッシングの「私にとっては真理そのものよりも、真理の探究の方が重要なのだ」という言葉によって例証し、「学問の根本秘密」を暴くものとして位置付けている (ibid.) ⁽⁶⁾。つまり、ニーチェはこうした理解によって、学問とは、知識を知識そのもののために追求することの快樂によって駆動されている営みである、という事態を捉えようとしているのである。

かくして、「ソクラテス的な認識の快樂」を「ソクラテス主義」に基づく学問的探究の一契機として捉える主張は、知識が知識として追求されるとき、学問的探究の喜びにおいて、人間は生存の無根拠性を乗り越えることができる、という事態を意味していることが判明した。

2.3 学問による生存の無根拠性への対処 (2) : 妄想

しかしながら、「ソクラテス的な認識の快樂」だけでは生存の無根拠性への対処になるとは考えにくい。というのも、学問が生存の無根拠性そのものを暴き出してしまう可能性があるからである。たとえば、人間の生存の目的が哲学的に問われるとき、目的そのものが存在せず、生存が目的たる根拠を欠いているという事態が、かえって明確に洞察されてしまうかもしれない。

したがって、学問的探究がペシミズムへの治療法として機能するためには、探究が無根拠性の洞察へと突き抜けてしまわないように、目的への問いがあらかじめ応答可能な問題として枠づけられている必要がある。この点において注目すべきなのが、ニーチェのいう「理論的人間」の次のような態度である。

理論的人間は知識による世界の修正、学問によって導かれる生を信じ、実際に、個々人を解決可能な課題の狭隘極まる領域へと呪縛することもできる。その領域のなかで、個々人は生に向かって快活に次のように述べるのである。
「私はお前を欲する。お前は認識されるに値するのである。」 (GT 17, 115)

6 これはレッシングの『再答弁』の記述を踏まえたものだが、正確な引用ではなくニーチェによるパラフレーズである (Schmidt 2012, 301-2; cf. Lessing 1979, 33)。

「理論的人間」は「生」の認識可能性への信念によって、生きることを動機づけられている。つまり、人間は生存の目的への問いを「解決可能な課題」として捉えることで、生存をその目的が認識され得るものとして前提することができる。

ここで必要になるのが、「生存の永遠の傷を認識によって癒すことができるという妄想」である（GT 18, 115-6）。これは「生存の永遠の傷」たる生存の無根拠性を「認識」によって解消することができるという信念と解釈することができる。換言すれば、これは学問的認識が生存の目的を明らかにし、生存を正当化することができるという信念である。先に「ソクラテス主義」の要素として確認した、「思考が因果の導きによって存在の最内奥にまで到達し、存在を認識することができるだけでなく、存在を修正することさえ可能であるという不動の信念」ないし「形而上学的妄想」も、この信念と基本的に同じものだと考えてよいだろう。この信念があることによって、生存の目的が不明であるという事態は、解決不可能な問題ではなく、学問によって解決されるべき課題として了解されることになるのである⁽⁷⁾。

このように、ニーチェは「ソクラテス主義」による生存の苦悩への対処を、「生存の永遠の傷を認識によって癒すことができるという妄想」が、「ソクラテス的な認識の快楽」による生存の無根拠性への対処を支える、という構造から理解するのである。では、こうした構造はいかにして實在論的信念に依存しているのだろうか。

3. 實在論的信念の基礎性と目的論

3.1 「妄想」の基礎としての實在論的信念

實在論的信念が不可欠であるのは、生存の無根拠性という問題への応答には絶対性ないし不可謬性が求められるからであると考えられる。学問によって知識が得られてもなお、その知識が人間の生存の目的という問題への最終的な答えにならないとしたら、人間は自身の生存が結局のところ目的を欠いているのではないか、という疑念を禁じ得ないだろう。

このことは「真理の情熱について」（1872年）でニーチェが、「哲学者の致命的な好奇心」を「いつしか裂け目を通して、意識の部屋から抜け出て自由自在に見回

7 なお、この信念は「本能」であるとされているため、学問的探究主体がもついわば暗黙の信念と理解するべきであろう（GT 15, 99）。

すことを要求する」ものと特徴づける点に表れている (UP, 760)。哲学者は人間的な意識の制約から抜け出て、知識の妥当性を究極的に基礎づけようとする。このとき、学問的認識は対象それ自体の姿を明らかにするのだと信じられていれば、学問によって獲得される知識はいかなる視点からも相対化されることのない確実なものとして理解され、生存の無根拠性への不安から完全に逃れることができる。

そして、カントとショーペンハウアーの哲学がソクラテス主義的な学問観によって破壊的なものとして位置付けられる理由も、以上の点から理解できる。彼らの哲学によって、対象それ自体に対する知識の妥当性が退けられてしまうと、生存の目的への問いにどんな答えが与えられようとも、それを疑うことが可能になる文脈が想定されてしまう。すなわち、ある知識が私たちの抱きうる信念として、どんなに整合的で正当であるとしても、それは対象それ自体には妥当するのか、それは「単なる現象」ないし「マヤーの産物」に過ぎないのではないかと疑うことが常に可能になってしまうのである (GT 18, 118)。

かくして、實在論的信念が不可欠である理由が明らかになった。實在論的信念は、学問によってなされるべき生存の目的への問いの応答が、懐疑の余地や可謬性をもたないものだとして前提し、生存の無根拠性という問題を解決可能なものとして理解するために必要なのである。實在論的信念を「妄想」の基礎として位置付けるこの読解は、「上述のような事物の本性の究明可能性への信念において」、「知識と認識に万能薬の力」が与えられるとする記述とも親和的であろう (GT 15, 100)。

もっとも、ここまでで明らかになったのは、生存それ自体の目的が認識可能だという信念の不可欠性である。しかし、實在論的信念は「事物の本性の究明可能性への信念」ないし「全太陽系の合法則性への信念」、つまり万物の認識可能性への信念である。そのため、以下では対象それ自体の認識可能性への信念が、生存だけでなく万物にまで拡張される理由を明らかにする必要があるだろう。

3.2 オプティミズムと目的論

この点を明らかにするためには、ニーチェが「ソクラテス主義」というオプティミズムの起源をソクラテスという人物に見た点が重要になる。ニーチェはソクラテスにおいて、「オプティミズムの三つの根本定式」が提示されたのを見て取っている。それは「徳は知識である、無知からのみ罪は犯される、有徳な者は幸福な者である」という命題である (GT 14, 94)。

一方でこの命題は、ソクラテスにおいて倫理的事柄を巡る探究が主題化され、そ

の探究が幸福な生の探求でもあったことを意味している。他方、「オプティミズム」の命題であることを踏まえると、この命題は、生存の無根拠性に応えるものだということになる。すると、ここで示されているのは、人間の生存の目的を「幸福」として規定する立場であると考えられる。

幸福が生存の目的であるとすれば、すなわち、人間は幸福たべく存在するのだとすれば、生存は自分自身以外のためのものではない、ということになる。かくして、ニーチェはソクラテスにおいて、個人が共同体の繁栄などの上位の目的への従属から解放されるという事態を見る。『誕生』とほぼ同時期、1872年夏から1873年初頭の遺稿には次のようにある。「ソクラテス以降、もはや公共の繁栄は守られない。だからこそ、個々人を救おうとする個別化した倫理」(KSA 7, 19[20])。つまり、ソクラテスにおいて、生存は幸福たべく存在する自己目的的なものと理解されるようになった、とニーチェは考えるのである。

そして、生存は幸福たべく与えられているなら、世界は幸福を可能にするようなあり方をしていなければならないだろう。ニーチェは自己目的性と世界の在り方への信念のこうした連関を、カントの『判断力批判』を通じて学んでいた。以下は1868年に書かれた、『判断力批判』第67節からの要約・書き抜きの一部である。

自然目的の概念は有機体にのみ属している。／「しかし」とカントは言う。「この概念はいまや必然的に、目的の規則に従う体系としての全自然という理念をもたらすことになる」／「自然がその有機的所産において与える実例によって、[……] 自然ないし自然法則を全体として合目的的であるにほかならないものとして期待する権利が与えられる」(KGW I / 4 62[43] 省略はニーチェによるもの; cf. Kant 1968, 378-9)

ここで登場する「自然目的」の概念は、自己目的的であるような存在者を意味する。ニーチェ自身も書き抜いているように、「事物はそれ自身 [……] 原因でありかつ結果でもあるなら、自然目的として存在する」(ibid. 省略はニーチェによるもの; cf. Kant 1968, 370)。つまり、上掲の引用では、自己目的であるような存在者を認めることによって、自然の全体が当該の存在者へと収束する目的論的体系性をもつものとして期待される次第が語られているのである。

目下の文脈に引き付けて言えば、この次第は次のように理解できる。まず、人間の生存に幸福という目的が与えられているのだとすれば、世界には人間の幸福の可

能性を決定的に損なうものは存在しないと考へねばならない。むしろ、例えばある地域の天候はその地域の草木の成長のためにあり、草木は草食動物のために、そして草食動物は人間に家畜化されるために、といったように万物は人間の生存との連関において、何らかの仕方で幸福という目的に適う体系的連関を持つと期待される。

実際、ニーチェは「ソクラテス主義」を「万人の地上の幸福への信念」とも規定している (GT 18, 117)。それだけでなく、ソクラテス以前の哲学者とソクラテスの相違点を考察する 1872 年冬から 1873 年のものとされる遺稿には次のようにある。

ソクラテスとともに[・][・][・][・][・][・]オプティミズムがはじまるのだが、このオプティミズムはもはや芸術的ではなく、目的論と善なる神への信念とともにある。そして、善なる知者への信念。(KSA 7, 23[35])

ニーチェはここで「目的論と善なる神への信念」の導入にソクラテスの革新性を見ている。重要なのは「善なる神」という要素である。「オプティミズム」や「目的論」と結びついているという点で、この「神」は万物を善なる目的に適うものとして生み出した神だと考えられる。ニーチェはソクラテスの立場を、神によって秩序付けられた世界全体の目的論的な体系性さえも信じる立場として解釈しているのである。

こうして、生存の自己目的性への信念が世界全体の目的論的体系性への信念へと拡張されるのに応じて、世界全体が学問的認識の対象になることも期待される。すなわち、人間の生存は学問的認識によって真の姿を露にし、幸福という目的に適ったものであることが判明するとすれば、万物は学問的認識のもとで目的に適ったものであると判明すると信じられるのである。死に対するソクラテスの態度を解釈して、ニーチェが述べているのは、まさにこうした指摘である。本稿冒頭で引用した記述を再度確認しよう。

そしてそれゆえに、死へと赴く[・][・][・][・][・][・]ソクラテスの像は知識と論証によって死の恐怖から解放された人間の像として、学問の入り口に掲げられ、各人に学問の使命を想起させる紋章の盾なのである。その使命とはすなわち、生存を理解するものにし、それによって、正当化されたものとして現れさせることである。(GT 15, 99)

しばしば指摘されるように、この一節はプラトンの『パイドン』を踏まえて書かれているため、その文脈を補って読めば次のようになろう（cf. Schmidt 2012, 303; Siemens 2021, chap. 4）。死は害悪だと思われていれば、恐怖を引き起こさずにはいない。しかし、その本性——死は肉体と魂の分離に過ぎないこと、魂は不死であること——が正しく認識されれば、死は死後の生における真理の観照の幸福という目的に適ったものとして了解可能になる、という信念が死に向かうソクラテスの安らかな態度を可能にした（cf. プラトン 1975, 186; 320; 339）。ここにニーチェは、どんな事物であろうと、その本性が正しく認識されれば、目的に適ったものであることが明らかになるという信念を見だし、それが学問的探究の性格を規定してきたと主張するのである。

また、万物が学問的認識のもとで目的に適ったものとして現れてくるという信念は、「ソクラテス的な認識の快楽」への没入を可能にするものでもあると考えられる。というのも、この信念があれば、それこそ死のような、人間の幸福を損なうように見える不可避の事象があったとしても、当該の事象を人間の幸福の可能性への反証とする考えを、仮象として退けることができるようになるからである。

かくして、「ソクラテス主義」が万物の認識可能性への信念に立脚するものとされる理由も明らかになった。「ソクラテス主義」は生存の目的を幸福として見いだすことを期待するがゆえに、幸福を可能にする世界全体の目的論的体系性も、学問によって解明されることを前提とせざるをえない。だからこそ、学問は世界全体のそれ自体としての姿を捉えるものであると了解されるのである。

結論

本稿の考察を通じて、ニーチェが何を学問に帰されてきた価値と見なし、それを實在論的信念に基づくものであると論じた理由が明らかになった。ソクラテス主義的な学問観において、学問は生存の無根拠性に対処するものとして価値づけられている。そして、實在論的信念は、学問的探究の帰結として、人間の生存をはじめとする諸事物が目的論的な体系に組み込まれたものとして現れてくることへの期待を、揺るぎないものとする機能をもつ。かくして、實在論的信念があつてこそ、学問的探究の主体（「理論的人間」）は生存の目的の不在に悩まされることなく、探究に没頭することができるのである。いわば、ニーチェは学問的探究への没頭を可能

にする信念を分析することによって、伝統的な学問観を、真理が何か恐るべきものとして——人間の生存が無根拠であることを露にするものとして——現れる可能性を排除する信念体系として捉えているのである⁽⁸⁾。

参考文献

原文での強調は傍点で示す。適宜 [……] による省略や () での原語の挿入を行ったが、それらは断りが無い限り引用者によるものである。

ニーチェからの引用

『悲劇の誕生』(略号: GT) と「真理の情熱について」(略号: UP) の引用は KSA (Nietzsche, Friedrich. 1980. *Sämtliche Werke: Kritische Studienausgabe in 15 Banden*. Ed. Giorgio Colli and Mazzino Montinari. De Gruyter.) の略号・節(『悲劇の誕生』の場合)・頁数を、遺稿の場合は KSA ないし KGW (Nietzsche, Friedrich. 1967ff. *Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe*. Ed. Giorgio Colli and Mazzino Montinari. De Gruyter.) の巻数と整理番号を記載する。

その他の文献

- Came, Daniel. 2018. The Socratic justification of existence: Nietzsche on Wissenschaft and existential meaning. In *The Nietzschean Mind*, ed. Paul Kasafanas, 415–27. Routledge.
- Gerhardt, Volker. 1998. Die Moderne beginnt mit Sokrates. In *Aufklärung als praktische Philosophie: Werner Schneider zum 65. Geburtstag*, ed. Frank Grunet and Friedrich Vollhardt, 2–20. Max Niemeyer.
- 五郎丸仁美. 2004. 『遊戯の誕生——カント、シラー美学から初期ニーチェへ——』. 国際基督教大学比較文化研究会.
- Kant, Immanuel. 1968. *Kritik der Urteilskraft*. In *Kants Werke: Akademie Textausgabe*, vol. 5, ed. Der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, 165–475. De Gruyter.
- Lessing, Gotthold Ephraim. 1979. *Eine Duplik*. In *Werke*, vol. 8, ed. Herbert G. Göpfert, 30–101. C. Hanser.
- プラトン. 1975. 『パイドン』. 松永雄二訳. 『プラトン全集』, 第 1 巻, 田中美知太郎・藤沢令夫編, 153–353. 岩波書店.

8 本稿は JSPS 科研費(特別研究員奨励費 25KJ0850)の成果の一部である。また、本稿への古荘真敬先生のコメントに感謝申し上げる。

Schmidt, Jochen. 2012. *Kommentar zu Nietzsches Die Geburt der Tragödie*. De Gruyter.

Siemens, Herman. 2021. *Agonal Perspectives on Nietzsche's Philosophy of Critical Transvaluation*. De Gruyter.

Silk, Michael Stephan and Joseph Peter Stern. 2016. *Nietzsche on Tragedy*. Cambridge University Press. (Orig. pub. 1981)

竹内綱史. 2009. 「アポロンとソクラテス——『悲劇の誕生』の歴史哲学再考——」, 『メタフシカ』, 第40号, 13-26.